

令和5年度 「スラブ・ユーラシア地域（旧ソ連・東欧）を中心とした総合的研究」に関わる  
「共同研究班」 研究報告書

令和6年4月28日現在

研究課題名	④スラブ・ユーラシア地域の文化・言語		
担当者	氏名		所属機関・職
	1	野町 素己	北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター・教授
	2	安達 大輔	北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター・准教授
班員	氏名		所属機関・職
	清沢 紫織		北海学園大学・講師
	専門とする研究分野		
	スラヴ語学（東スラヴ諸語）/ 言語政策研究（言語法、標準語化）		
研究テーマ			
東スラヴ諸語の標準語書記体系の成立過程におけるラテン文字使用をめぐる問題			

### 研究成果の概要

本研究は、東スラヴ諸語（ベラルーシ語、ウクライナ語等）の標準語書記体系の成立過程におけるラテン文字表記の使用実態とそれを支える言語イデオロギーを比較考察し、相対的にマイノリティであるラテン文字使用の支持者がどのようにマジョリティのキリル文字使用者と共存や対立等の関係を経てきたのかといった生存戦略の実態を明らかにすることを目的とするものである。本年は、特にこの問題をめぐる最新の政治社会情勢との関連から集中的に研究を行った。研究成果は以下のとおりである。

まず、ベラルーシ語の表記におけるラテン文字使用をめぐる最新の動向について、2020年の大統領選挙不正に関わる大規模抗議活動後のベラルーシの状況に焦点を当てて考察を行った。具体的にはベラルーシ政府が看板類におけるラテン文字表記の地名表示の廃止を決めたこととそれに対抗する形で生じた草の根のラテン文字表記使用の増加の実態について考察した。この成果についてはソビエト史研究会のパネルディスカッションにて口頭発表を行った。

またこうしたベラルーシ語の表記をめぐるラテン文字使用への関心の高まりについて、2022年のロシア軍侵攻以降のウクライナ語の表記をめぐる最新の動向と合わせて比較考察を行った。ウクライナ語に関しては、歴史的に見れば19世紀にラテン文字表記の導入をめぐる論争があったが、近年、特に2022年のロシア軍の侵攻以降は、表記法を含むいくつかの新しい変化が観察されているものの、ベラルーシ語をめぐる状況とは異なり、ラテン文字表記採用への支持者はごく少数で国内において大きな議論も呼んでいないという点を指摘した。この成果については日本ロシア文学会のワークショップにて口頭発表を行った。

さらにベラルーシ語のラテン文字表記をめぐる問題については、ラテン文字表記がこれまでどのように用いられてきたかを通時的に考察したうえで、近年ではベラルーシ語を書き表す際にキ

**研究成果の概要（続き）**

リル文字を排除しラテン文字表記を単独で用いることよりも、キリル文字表記とラテン文字表記を並行的に使用するダイグラフィアの状況がベラルーシ語の言語的独自性として象徴的な価値をもつようになってきているという点を明らかにした。この成果については、ワルシャワ大学で行われた国際学会にて口頭発表を行った。

また、こうしたベラルーシ語の表記にラテン文字とキリル文字を並行的に用いるダイグラフィアが、実際の言語使用実践の中でどのようにみられるのかについて、ラテン文字表記の使用が伝統的に長く続けられてきたリトアニアのヴィリニュスの言語景観を事例として考察を行った。考察を通してヴィリニュスにおいては、市街地の記念碑類、ベラルーシ文化関連施設等ではより公的で情報伝達に重点を置いた内容にはキリル文字表記が用いられ、墓碑といったより私的で象徴的な内容にはラテン文字表記が用いられ傾向があることを指摘した。この成果については、日本スラヴ学研究会において「言語景観からみるスラヴ諸語」というパネル発表を企画し、口頭発表を行った。

なお清沢が主宰し企画実施したこのパネル発表では、リトアニアにおけるベラルーシ語のみならず、ラトヴィアにおけるロシア語とウクライナ語、モルドバにおけるブルガリア語の状況についての報告が行われ、マイノリティ言語として使用される多様なスラヴ語の実態に言語景観という観点から注目した。それぞれのスラヴ語が話者を取り巻く空間内にマジョリティ言語と共にいかに可視化されているかを比較考察し、それぞれのスラヴ語の生存戦略についても議論した。

現在はこれらの口頭発表の内容を論文としてまとめ、2024年度中に雑誌投稿することを目指している。最後に今回、共同研究員としてセンターの研究プロジェクトに参加いただく貴重な機会をいただきましたことを心よりお礼申し上げます。

**主な発表論文等（雑誌論文、学会発表、図書 等）※謝辞の有無について明記願います。**

1. 清沢紫織「抗議活動と戦争の中での言語イデオロギー：ベラルーシ語の書記体系をめぐって」、ソビエト史研究会 2023 年度大会：パネルディスカッション「ロシア＝ウクライナ戦争とユーラシア諸国」、専修大学サテライトキャンパス、2023 年 7 月 8 日（口頭発表、査読無し、謝辞無し）
2. 清沢紫織「ベラルーシ語とウクライナ語の書記体系の発展をめぐる最新動向」、日本ロシア文学会第 73 回大会：ワークショップ「ロシア周辺における現在の文化的状況について」、専修大学サテライトキャンパス、2023 年 10 月 22 日（口頭発表、査読無し、謝辞無し）
3. Сиори Киёсава “Символическое значение диграфии для белорусского языка,” *Międzynarodowa Konferencja Naukowa: Język, literatura i kultura Białorusi w Polsce i na świecie*, Katedra Białorusistyki Uniwersytetu Warszawskiego, 25 marca 2024 roku（口頭発表、査読無し、謝辞無し）
4. 清沢紫織「リトアニアの言語景観におけるベラルーシ語」、日本スラヴ学研究会 2023 年度研究発表会：パネル発表「言語景観からみるスラヴ諸語」、慶應義塾大学日吉キャンパス、2024 年 3 月 30 日（パネル企画者・口頭発表、査読無し、謝辞無し）

当該研究活動をもとに採択された研究プロジェクト（応募中の研究プロジェクトを含む）  
無し

※枠を調整することは構いませんが、ページは追加しないでください。